

コラム

インターネットの光と影

**6月「秋葉原事件」後、
犯罪予告と検挙が激増**

2008年6月8日に東京・秋葉原で起きた無差別殺傷事件の後、犯行直前に無料レンタル掲示板に予告を書き込んでいた容疑者を模倣するかのよう殺人予告や爆破予告があちこちの掲示板に書き込まれた。

事件発生次の日、警察庁は犯罪予告が書き込まれた場合、110番通報するよう通信業界4団体に要請。総務省も電気通信事業者約1万4000社に110番通報への協力を呼びかけた。これまで見過ごされてきたものも通報され、異例の速さで検挙される流れができた。事件後1、2か月で、1年分ほどの予告と検挙が展開されたと言っている。「セキュリティ通信」編集部調べでは、検挙者は6月の32人、7月の30人をピークに1年間で100人を超えた。

6月14日、容疑者が書き込んだのと同じ掲示板に「明日、九州のある駅で歴史に残る大量殺人する」「俺、死刑になる」などと書き込み、業務妨害の疑いで事情聴取されたのはアルバイトの17歳の少女だった。同10日、ネット掲示板に「新潟駅に放火した後、無差別殺人を起こします」と書き込んで補導されたのは、13歳の男子中学生だった。摘発された予告書き込みのほとんどは、こうした一時的熱病のようなものだったが、実際に「犯行予告」だった例もある。より有効なスクリーニングのためにも、ネット上に犯罪予告を書き込めば、業務妨害や脅迫の罪に問われることを周知することは重要だろう。子どもたちにも、たとえ小中学生によるいたづらでも、兇相通告や家裁送致などの処置がとられることを、家庭や学校で教えていきたい。

**ブログに書いたコメントが、
名誉棄損、脅迫容疑で送検**

犯罪予告ではなく、芸能人のブログに

書いたコメントが原因で検挙される事件も起きた。お笑いタレントのスマイリーキクチさんのブログで、2008年1月の開設以来、毎日コメント欄に誹謗中傷が書き込まれていた。キクチさんが某殺人事件の犯人で、事件をお笑いのネタにした等の噂が10年ほど前からネットで書かれるようになり、それを信じた人たちによる攻撃だった。「生きる資格ない」「死ぬ」などという暴言が書かれ、キクチさんは事務所ホームページや自身のブログで事実無根を訴えてきたがエスカレートは止められず、警察と相談の上、被害届を出すことを決めたという。

警視庁は2009年2～3月、殺害予告ととれる書き込みをした男女7人を脅迫や名誉棄損容疑で書類送検している。この事件には、ネットで書かれた嘘が10年にもわたって語り継がれるうちに真実味を増し、信じる人たちが多数形成されていったという背景がある。検挙された人たちは悪意ではなく正義感に燃えていたということも一面の真実で、嘘を信じて暴走してしまう怖さを思い知らされる。

**ネットの自殺予告でISPと
警察が連携、95名を保護**

日本の年間自殺者総数は、1998年に前年から8472名も急増して3万人台となり、それ以降は10年以上にわたって3万人超が続いている。2008年は3万2249人で、前年比ではやや減少したものの、深刻な数字であることは変わらない。

掲示板やチャット、メールなどを使った自殺予告は警察へ通報されるが、2008年に全国の警察が通報を受けたネット上の自殺予告は180件196名で、過去最多となった。2005年に作られたガイドラインにより、警察は緊急性があるものについては接続業者に発信者情報開示を求め、保護活動を行うことができる。

警察が自殺予告を把握した196名のうち20人は書き込み者が判明しなかったが、176名は身元を特定し、うち92名については警察が駆けつけて保護し、自殺を思いとどまらせることができた。10人は救護が間に合わず自殺を図った後だったが、そのうち3名は病院に搬送して一命をとりとめたという。

95名の命をネットの連携で救うことができたわけで、深刻な状況が続くなか、一条の光を見る思いがする。2008年は硫化水素自殺が注目された年でもあるが、ヤフーは「Yahoo! 検索」で硫化水素と自殺に関連付けて検索した場合、自殺予防ページのリンクを表示し、「いのちの電話」などの相談窓口が案内されるようになっている。このようなネットならではの地道な積み重ねに期待したい。

**闘病する人たちが情報を
共有し支え合う「TOBYO」**

自殺者の原因・動機で最も多いのは「健康問題」で、2番目の「経済・生活問題」の2倍以上にもなっている。病気と闘う人を支える仕組みがもっと確かなものとして社会にあれば、自殺は減らせるに違いない。「TOBYO」は、闘病する人たちが綴る闘病体験記ブログを集め、情報を共有するサイトだ。2009年5月から闘病記に特化したバーティカル検索エンジン「TOBYO 事典」テスト版を公開。1万余の闘病サイト、8414の闘病ブログ等を対象に、病名や薬名、性別や年齢など、キーワード検索で必要な情報を探することができる。かつて患者同士のクチコミで細々と伝えられてきた情報がウェブで共有されるようになれば、より大規模でオープンな活用しやすいものになるだろう。情報というだけでなく、患者と患者を支える家族が孤立せずネットワークし合えるようになることの意味も大きい。（現代フォーラム「セキュリティ通信」編集部）



[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、データ、URL、名称など）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真・図の作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D（初期は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp